

はいひならはしたるにこそ、後撰歌云

いにしへの野中の玄水みるからにさしくむ物はなみだなりけり
又もとのめにかへりすむと聞て

わがためはいとあさくや成ぬらん野中の清水ふかさまされば
拾遺集にふかく物いひける人に元輔がつかはしける、

草がくれかれにし水はぬるくともむすびし身にはいまもかはらず

同集にけさうする女の更に返事もせざりければ實方中將、

わがためは玉井の玄みづぬるけれどなをかきやらんとくもすむやと

此歌どもはみな古今のいにしへの野中の清水ぬれけれど、いふ歌をためしにてよめるな

り○中
略

和語抄には野中の玄水は河内國にも有といへり、

奥義抄云、野中の玄みづとは此玄みづの事やうありげに申人も侍れど、させる見えたる事
もなし、この水は、ぱりまのいなみ野にある也、始はめでたき水にて有けるが、すゑにはぬる
く成て、人などもすさめぬを、むかしを聞つたへたるもの、これにはめでたき水ありとこ
そきげとて、尋てみると、あさましくきたなげになりてありけれども、これはめでたかりけ
る水也、いかでかのまで過なんとてのまれける事をよめるとぞ申める、それより本を玄れ
る事にいひつたへたる也、いまはかたも侍らぬにや、是は人のかたりし事也、見たる心もな
ければ、たのみがたし、

私云、まことにたしかに見えたる事もなし、此歌につきていへるにこそ、中にもかの玄水いま
はかたもなしとか、れたるいかゞなをめでたき玄水にてこそ侍なれ、ぱりまのいなみのほ